

## 歴史（日本古代史）科目における課題学習の取り組み

鷺 森 浩 幸

### はじめに

筆者は帝塚山大学文学部において、「古代史A・B」（前期・後期 各2単位）を担当してきた。当該科目は「中世史」「近世史」「近・現代史」とならんで文学部カリキュラムの専門基幹科目のなかの歴史・文化財系に属し、いわゆる文献史学のもっとも基準的なものである。A・Bあわせて授業回数は30回、毎年、これだけの時間数をかけて古代史（3世紀の邪馬台国あたりから12世紀の平氏政権まで）のみを講義するという、ほかにあまり例をみない科目ではないかと思われる。受講生は近年、おおむね70、80人である。本稿は古代史A・Bにおいて、現在まで15年程度行ってきた、レポート課題に取り組む学習に関する事例報告である。なお、もともと単純な知識の確認のようなものも含めて出発したが、徐々に形を変え、現状に至っている。

現行の学習指導要領（2018年告示 2021年一部改定）において、「主体的・対話的で深い学び」の実現が基本方針とされ、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることの重要性が指摘されている。地理歴史科でも、それは「社会的事象の地理的な見方・考え方」「社会的事象の歴史的な見方・考え方」と具体化され、歴史的な領域では、「主題」や「問い」の設定を前提として、事象の意味や意義を見いだし、課題を探究する学習が求められている。また、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けることが求められ、「考察する際の根拠となる資料」が重要視されている。このような方針をまさに体現するといっているのが新科目「歴史総合」である。これらの地理歴史科の現状から浮かび上がる学習の姿は、まずテーマを設定し、資料（文献史学の場合、主に文字で表記された「史料」）をもとづき考察するという学問としての文献史学のそれそのものである。

このような状況のもとで、通常の講義科目であるが、受講生に部分的にでも文献史学の学問的なプロセスにふれてもらうことをめざして、行ってきたものが本稿の試みである。一方で、より実的な要請は、講義科目において、単調な授業内容にならず、起伏を付けることができるかということであった。90分間の授業時間のなかで、2、3の時間的なまとまりが継的に過ぎていく形態が講義科目であっても理想的であると考えている。

## I. 課題の形式と内容

より詳しく、対象の説明を行う。この学習はほぼ毎回、10分の時間をとって行う。プリントを準備し、「質問」「考え方」を記す。「質問」は課題の内容、「考え方」は考察する際の順序を示すいくつかの補助的な問いである。この順序に従って考えることにより、「質問」の解答にたどり着くような形式を意識している。考察の結果は「課題シート」に200字程度のレポートの形式で書き、提出してもらう。「考え方」の各問いに対する解答を列挙するのではないとしばしば注意しているが、そのような解答も見受けられる。受講生にとって、自分の考えを的確に文章化することはある程度の苦労をとまなうこともあると感じる。

現状で採点・評価の対象とはしていない。テストだと思って欲しくないこと、近くの友人たちと話をしながら取り組んでくれてもいいと考えていることなどによる。評価と関わりがないので、まったく手をつけない受講生もいるが、おおむね真剣に取り組んでくれている。学生のまじめな姿勢を感じる瞬間である。平常的な評価とどのように結びつけていくかは授業構成上の課題である。なお、現在、当該科目はおもに学期末のテストによって評価している。受講生の提出レポートを読み、それぞれ次の回の冒頭で、実際の解答の紹介や解説を行う。その際、自分のレポートを手もとにおいておきたい受講生にはレポートを返却する。こちらからコメントを記しておくこともある。返却の希望は多くはないが、極めて希でもない。

質問の内容はいくつかのタイプに分類できる。第1に、史料や何らかの記述をもとに質問に答えるもの。実際の古代史研究の研究活動と成果を追体験するタイプが多い。たとえば、『日本書紀』の大化改新詔（「郡」の記載）と藤原京出土木簡を材料に『日本書紀』の史料価値を考えるテーマ。これはいわゆる郡評論争の追体験である。第2に、概説的な著作などの文章を読みレポートするもの。テーマに沿って要約する、文章中の結論とその根拠を析出する、複数の文章を読み主張の違いを説明する、などの形式のものを用意している。たとえば、藤原良房と文徳・清和天皇の関係に関する、2人の研究者の主張の違いを読み解くもの。主張が明確な根拠によって裏付けられることは論理的な思考の基本であり、そのトレーニングの意味を持たせている。また、学説には多様性があることを知ってもらうことも、学習の基本として重視されるであろう。第3に、ある史料を提示しそれを自由に読み解くもの。ブレイン・ストーミング（必ずしも集団的とはいえないが）である。たとえば、『日本霊異記』の説話から当時の社会についてわかることをレポートするもの。主題や問いの設定には自由な発想力が求められる。このケースではまったく自由に発想してもらっている。非常に豊かな発想力を示す解答例もある。以下、便宜的にA・Bごとに表の形式でそれぞれの課題（「質問」と「考え方」）を示す。表化するにあたり、表記などを改めているケースがあり、プリントそのままではない。

## Ⅱ. 小課題の具体例（邪馬台国から平城京）

授業回数 タイトル	
質問	考え方
1 ガイダンス	
質問の答えを考える、どちらがより信頼できるか、それはなぜ。	<p>(1).法隆寺はいつ、どのようにして創建されたか  A 舎人親王らの選で、720年に完成した、神代から持統天皇の時代までを扱う、公式の歴史書である『日本書紀』  B 607年、623年に作られたと記される金堂薬師如来像・金堂釈迦三尊像の光背銘</p> <p>(2).長屋王はどのような日常生活を送っていたか  A 1991年頃に書かれた里中満智子の『長屋王残照記』  B 死去まで居住したと考えられる平城京内の長屋王邸から出土した大量の木簡</p> <p>(3).どのような過程で東大寺の大仏は造立されたのか  A 中山忠親によって1195年頃に著されたと思われる、神武天皇から仁明天皇までの事績を記す『水鏡』  B 797年に完成した、文武天皇から桓武天皇までの事績をしるす、公式の歴史書である『続日本紀』</p> <p>(1).藤原道長の政治に対する考え方はどのようなものであったか  A 自筆本と後の写本からなり、998年から1021年の間の記事がのこる藤原道長の日記『御堂閨白記』  B 11世紀前半から12世紀初頭にかけて、宮廷女性の手によって完成され、藤原道長・頼通父子の栄華を称賛する傾向の強い『栄花物語』</p>
2 邪馬台国論争	
史料（『魏志』倭人伝）の記述は当時の倭人の普通の姿だろうか。証拠を示して自分の判断を述べなさい	<p>1.史料(1)は倭人の姿をどのように記述しているか  2.当時（弥生時代）の倭国の社会の特徴は何か（次の文章参照）</p> <p>弥生文化には水稲耕作をはじめとして、多くの文化や技術が中国や朝鮮半島から伝わった。稲の穂摘み用具である石包丁、木製農具をつくるための石斧類などは、朝鮮半島と共通する大陸系の磨製石器である。機織り技術も大陸から伝わった。銅と錫の合金である青銅器は前期、鉄器は前期末～中期初頭に出現するが、これらの金属器は中国や朝鮮半島からもたらされた代表的な道具である。弥生土器は縄文土器に朝鮮半島からの技術が加わって生み出された。  『詳説 日本史探究』より</p> <p>3.前掲2の特徴は史料の内容と整合的なか</p>
3 大和王権の成立	
次の命題は歴史的な事実として妥当か その判断の根拠は何か (1).雄略天皇は457年に即位し、479年に死去した（『日本書紀』） (2).当時の倭国の王の称号は天皇ではなく、大王であった (3).倭王武の先祖が武力により、倭国各地の諸勢力を平定した (4).雄略天皇の時代には大和王権の勢力は関東地方に及んだ	<p>1.『日本書紀』・『宋書』倭国伝・稲荷山古墳出土鉄剣銘の信頼性はどう考えられるか  2.各命題はどの史料を根拠とするか  3.史料の信頼性を考慮して、各命題の妥当性はどのように考えられるか</p>
4 継体天皇の即位	
下の文章は継体天皇の出自についてどのような立場をとっているか。	<p>継体を応神五世孫とする伝えについてであるが、それが記紀以前から存在した伝えであったことは認められる。しかしそのことは、それが継体即時まで遡る伝えであることを示すものではなく、またたとえ遡るとしても、事実であることを示すものではないのである。継体の即位は、そもそも王位が一定の血統に固定化されていない段階であったからこそ可能であったと考えられるのであり、そのような段階では、継体およびその支持勢力にとって、応神5世孫を唱える必要もなければ</p>

	<p>ばその意味もなかったはずである。応神5世孫については、やはり万世一系の考え方に基づき、記紀編纂に近い段階に至って作られた伝えとみるのが妥当であろう。継体の即位事情についてみてきたが、要するに継体は、前大王との血縁関係はなく、地方から前王権の本拠地であった大和に入り、その王権を継承した大王であったと考えられるのである。 篠川賢『継体天皇』より</p> <p>1. 応神天皇の5世孫という伝承についてどのように評価しているか 2. なぜ、継体天皇の即位が可能であったと考えているか</p>
5 大和王権の体制	
なぜ、倭国（日本の原型）は近畿地方を中心に成立したのか 自由に	<p>1. 交通のあり方に着目する 単純に近畿地方は日本列島（関東地方～北九州地方）のどこに位置するか キーワード：瀬戸内海・琵琶湖・太平洋岸・日本海岸 2. 生産力や富の存在に着目する 当時の生産のありかたは？ 富の源はなにか？ 3. そのほかに、思いつくことは何でもOK</p>
6 真実の聖徳太子	
史料(2)『日本書紀』に対して史料(3)『聖徳太子伝暦』は聖徳太子の人物像をどう描いているか	<p>1. 史料(3)において史料(2)と同じ内容はどの部分か（ ）から（ ）まで 2. 史料(3)において新たに付加された内容は何か（2点あり） 3. その部分は厩戸皇子をどのように描いているか</p>
7 中大兄皇子と大化改新	
『日本書紀』に収録された大化改新詔は史料として信頼できるか	<p>1. 『日本書紀』編者はもともとの改新詔を参照し『日本書紀』の記事を作った-史料(4) 改新詔の公布と『日本書紀』成立の間に年代差はあるか？ 偽造・改作の可能性は？ 2. 荷札木簡が偽造された可能性は？ あとで改作された可能性は？-史料(5) 3. 国の下位の区画「こおり」について『日本書紀』と荷札木簡の用字は整合的か より信頼性が高いのはどちらか</p>
8 白村江の戦いと壬申の乱	
壬申の乱の勝敗を分けたものはなにであっただろうか？	<p>1. 史料(6)から大海人皇子は当初、どのような戦略を有したと考えられるか 2. 史料(7)から大友皇子は当初、どのような戦略を有したと考えられるか 3. それぞれの戦略は実現したか、失敗に終わったか 大友皇子は筑紫や吉備の兵の動員に失敗した</p>
9 天武天皇と持統天皇	
太安万侶は日本語を的確に漢字で表記するために、どのような方法を用いたか？	<p>1. 安万侶は困難な問題に直面した 史料(8)から漢字の訓（くん 意味）によると&lt;例：「やま」を「山」と書く&gt;（ ） 漢字の音（おん 発音）によると&lt;例：「やま」を「夜麻」と書く&gt;（ ） 上の問題を解決するために、 1. 句のなかで音訓両方を用いる、または、すべて訓を用いることとした 辞理のわかりにくい場合には、注を付けることとした</p>
問題1 以下の句は何と読めばよいか 八俣遠呂知 赤加賀智 天照大御神之伊呂勢 問題2 「赤加賀智」とは何か 此謂赤加賀知者 今酸醬者也	<p>それぞれ音の部分、訓の部分はどこか</p>
10 最初の都城 藤原京	
王宮を藤原京のような都城にすることの意義は何だろうか？（自由に論じる）	<p>1. 下の文章を参考に自由に</p>

	<p>天武天皇は、都を近江から飛鳥に戻し、壬申の乱の翌673（天武2）年に飛鳥浄御原宮で即位し、乱の勝利者としての権威をいかして天皇を中心とした中央集権化政策をさらに進めた。『万葉集』には、壬申の乱ののち詠まれた歌として「大君は神にしませば赤駒のはらばふ田井を都となしつ」「大君は神にしませば水鳥の巣だく水沼を都となしつ」（巻19-4260・4262）など、奉仕する官人の立場から天皇を神格化した歌が登場する。---藤原京は、第1に、それまでの飛鳥の宮々（大王宮）が代替わりごとに運営したのとは違って持統・文武・元明3代の天皇の都として継承される都となった点、第2に、それまでは皇位継承候補を含む有力な王族や中央豪族が大王宮とは別にみづからの宮（皇子宮）や邸宅を構えていたのに対して、あらたに宮の周囲に京の区画（京城）を設け、王族・豪族に宅地を班給してその集住がはかられた点、そして第3に、それまでの地面を掘り込んで柱を建てる掘立柱建物の伝統的技法にかわって、礎石建ち・瓦葺きの大陸風建築の技法を用いた立派な大極殿・朝堂などの宮殿建築が建てられた点などに、新しい律令国家にふさわしい宮都としての歴史的 성격が指摘できる。 『大学の日本史1 古代』より</p>
11 律令体制の概要 1	
旧国名になじむ	（近畿地方の旧国名を答える）図(1)
12 律令体制の概要 2	
遣唐使船はなぜしばしば遭難してしまったのだろうか？（船がぼろいからであるか）	<p>1. 遭難の頻度と航路には関係がありそうか。航路の特徴も考慮して（表(1)から読み解く） 2. 2つの資料から、なぜ航路の変更が行われたと考えられるか 下の文と史料(9)</p> <p>新羅は唐軍に付き随い百済へ進軍。660年に百済を滅ぼし、663年に唐軍が白村江にて倭国の水軍を破ると（白村江の戦い）、668年に唐軍が高句麗を滅亡させた戦いにも従軍した。その後、唐が西方で吐蕃と戦争している隙に、新羅は676年に唐の行政府を奇襲して殺害、旧百済領と旧高句麗領の南半分を合わせて朝鮮半島をほぼ統一することに成功した（統一新羅時代）</p> <p>3. 遣唐使船の遭難の背景には何があったと考えられるか</p>
13 藤原不比等の時代	
天皇として即位するにはどのような条件があったと考えられるか（血統とは別に）？	<p>『続日本紀』にみえる皇太子首親王（聖武天皇）の即位までの記事 史料(10)</p> <p>1. 715年に首親王の即位が見送られた理由は何か この時、首は成人か？ なお、首親王は701年生まれ 2. 719年には首親王はどのように評価されているか 3. これらからみて719年の段階で首親王がまだ天皇としてふさわしくない点はなにか</p>
14 平城京と人々の生活	
安葬常麻呂解から判明する平城京における生活とはどのようなものか？ 自由に論じなさい-史料(11)	<p>たとえば、次のように考えるとどうか（自由な発想を求む） 1. 常麻呂はどのような地位の人物で、どのようなものが盗まれたのか それぞれ何のためのものか そこからどのような生活がうかがえるか 2. なぜこの文書には東市司が登場するのか</p>

使用した史料・図版など

史料(1)

『魏志倭人伝』

男子は大小無く、皆、黥面文身す。（略）今、倭の水人は沈没して魚、蛤を捕るを好み、文身は、亦、以って大魚、水禽を厭う。後、稍く以て飾と為る。諸国の文身は各に異なり、或いは左し、或いは右し、或いは大に、或いは小に。尊卑差有り。その道里を計るに、まさ

に会稽、東冶の東に在るべし。その風俗は淫ならず。男子は、皆、露紵し、木綿を以って頭を招る。その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うこと無し。婦人は被髪屈紵す。衣を作る事単被の如し。その中央を穿ち、頭を貫きてこれを衣る。

史料(2)

『日本書紀』厩戸皇子

皇后、懷妊開胎せん日に、禁中を巡行し、諸司を監察す。馬官に至りて、乃ち厩の戸に当りて、勞せずたちまちに産む

史料(3)

『聖徳太子伝暦』

元年壬辰の春正月一日、妃第中を巡りたまふに厩の下に到るとき、覺へず産すること有り。入胎したまふこと正月一日、開誕亦正月一日、総て一十二箇月を経たり。女孺驚き抱て疾く寢殿に入る。妃亦恙無して幄の内に安宿したまふ。皇子驚て侍從の庭に会へるに詢いたまふ。忽に赤黄の光り有て西方より至り、殿の内を照耀し良久して止んぬ。

史料(4)

『日本書紀』大化改新詔 第2条

凡そ郡は四十里を以ちて大郡とし、三十里以下四里以上を中郡とし、三里を小郡とせよ。

史料(5)

荷札木簡

- ・乙丑年十二月三野国ム下評 665 年
- ・大山五十戸造ム下部知ツ 従人田部児安
- ・丁酉年若狭国小丹生評岡田里三家人三成 697 年
- ・御調塩二斗
- ・尾治国知多郡× 702 年
- ・大宝二年□×

史料(6)

『日本書紀』 壬申の乱

（村国）男依、駅に乗りて来りて奏して曰く、「美濃の師三千人を發して、不破道を塞ぐを



得たり」。是において、天皇、雄依の務を美めて、既に郡家に到りて、先ず、高市皇子を不破に遣わし、軍事を監せしむ。山背部小田・安斗連阿加布を遣わして、東海軍を発す。又、稚桜部臣五百瀬・土師連馬手を遣わして、東山軍を発す。（略）尾張国司守小子部連鋤鉤、二万衆を率いて帰す。天皇即ち美めて、其の軍を分けて処処の道を塞ぐなり

#### 史料(7)

##### 『日本書紀』 壬申の乱

（大友皇子は）則ち韋那公磐楯・書直葉・忍坂直大摩侶を以て東国に遣わす。穗積臣百足・及び弟百枝・物部首日向以て倭京に遣わす。且、佐伯連男を筑紫に遣わす。樟使主磐手を吉備国に遣わす。並びに悉く兵を興さしむ。（略）東方の駅使磐楯ら、不破に及ぼんとするに、磐楯独り山中に兵あるを疑い、以て後れ緩くに行く。時に伏兵、山より出でて、葉等の後を遮ぎり、磐楯、見て、葉等の捕わるを知りて、則ち返りて逃走し、僅に脱する得たり。

#### 史料(8)

##### 『古事記』 序文

然れども上古の時、言と意とみな朴にして、文を敷き句を構ふること、字にはすなはち難し。已に訓に因りて述ぶれば、詞は心にいたらず。全く音を以ちて連ぬれば、事の趣更に長し。ここを以ちて今或るは一句の中に、音と訓とを交へ用い、或るは一事の内に、全く訓を以ちて録しぬ。すなはち辞理の見えがたきは、注を以ちて明にし、意況の解き易きは更に注さず。また姓の目下に、玖沙訶と謂ひ、名の帯の字に多羅斯といふ。かくの如き類は、本に随ひて改めず。

#### 史料(9)

##### 『続日本紀』

中納言正三位多治比真人県守を兵部曹司に遣わし新羅使の入朝の旨を問わしむ。新羅国輒く本号を改め王城国という。これに因りて其の使を返却す。

#### 史料(10)

皇太子首親王（『続日本紀』より）

714年6月 皇太子に元服を加う。

715年9月（元明讓位・元正即位）

詔して曰く （略）この神器を皇太子に譲ろうと思う。しかし年令は幼く 未だ宮殿の奥深くを離れていない。（略）今 皇帝位を（氷高）内親王に伝える。

719年6月 皇太子が始めて朝政に関わる。

719年10月（新田部・舎人親王に皇太子補佐を命じる）

詔して曰く （略）皇位を承けつぐのは皇太子であるが、年令が若く未だ政道に通じていない。（略）舎人・新田部親王は、（略）清直なことを提起し皇室をたすけ、仁義を広め幼令の皇太子をささえなさい。

史料(1) 安拝常麻呂解 正倉院文書

謹解 申所盗物事

合壹拾参種

麻朝服一領 葛布半臂一領 帛褌一要 麻糸抜一箇 帛被一蓋 紵帳一張 調布帳一張  
被宮一合 緑裳一要 青裳一要 斜一面〈略〉赤漆真弓一枝〈小々削黒漆端〉 幌二具  
右等物 六条二坊安拝常麻呂之家 以去八月廿八日夜所盗 注状以解

天平七年閏十一月五日

中宮職舎人少初位上中臣酒人宿祢久治良

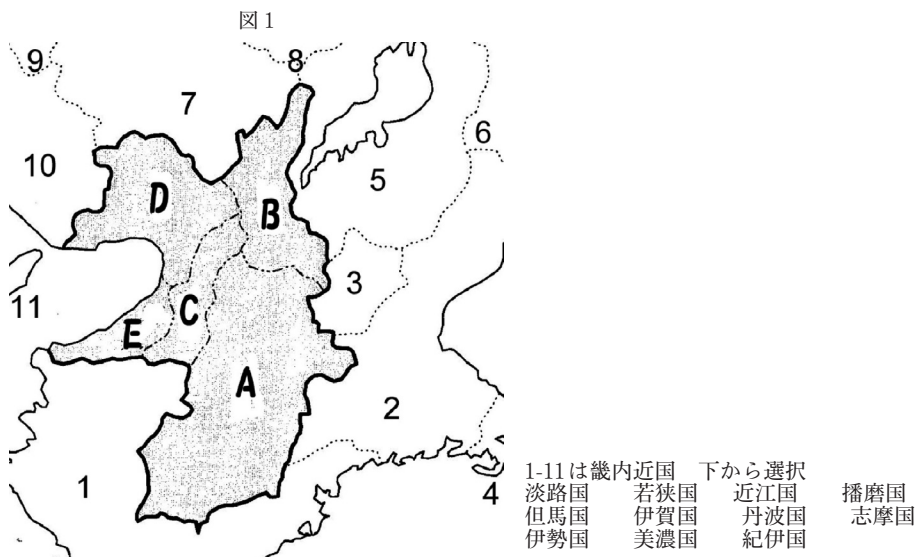
左大舎人寮少属大初位下安拝朝臣常麻呂

職符 東市司

件所盗物 父以去八月廿八日申送如前

大進大津連船人

少属衣縫連人君





表(1)

西暦	航路	使の状況
630	北路	
653	北路・南路	復路で遭難
654	北路	
659	南路	往路で南海の島に漂着
665	北路	
667	北路	唐には行っていない？
669	不明	
702	南路	最初、渡海できず 帰路遭難（福江島に漂着）
717	南路	
733	南路	帰路で遭難（唐に戻される・崑崙に漂着）
752	南路	鑑真来日 帰路で遭難（琉球から安南に漂着）
759	南路	
777	南路	帰路で遭難（船が破断・耽羅島に漂着）
779	南路	
804	南路	往路で遭難（座礁）
838	南路	2度、渡航失敗 帰路で遭難（南海の島に漂着）

### Ⅲ. 小課題の具体例（聖武天皇の即位から平氏政権）

2 聖武天皇の生涯	
大仏造立をにこめられた聖武天皇の意思とはどのようなものであったか？ 史料(1)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大仏造立に至った社会や政治の動きをもう一度確認してみよう（3つのできごと） 聖武天皇の地位の安定性はどうか？</li> <li>2. 「天下の富を有つは朕なり 天下の勢を有つは朕なり」とはどういう意味か この表現はどのような天皇の地位を連想させるか</li> <li>3. 「もし更に人有りて一枝の草・一把の土を持ちて像を助け造らんと情に願はば、恣に聴せ」とはどういう意味かなぜ、このような呼びかけをしたのか</li> </ol>
3 長屋王の生活と生涯	
国は当時の村や民衆の生活について、どのような点を問題視していたかそれはなぜか？（加茂遺跡の勝示札から） 史料(2)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これらの規則をいくつかの生活の場面に分類してみよう（ ）の場面 増やしてもよい</li> <li>2. それぞれの場面ではどのような民衆の行為が問題視されたといえるか（書かれているままだ）</li> <li>3. 国からみて、このような点はなぜ問題であったのか</li> </ol>
4 光明皇太后と藤原仲麻呂	
橘奈良麻呂の変の時、大伴古麻呂と家持はどのように考え、行動したか、	1. 史料(3) 橘奈良麻呂と大伴古麻呂の会話 奈良麻呂は何をしようとしていたか

歴史（日本古代史）科目における課題学習の取り組み

史料(3)(4)から読み解いてみよう	古麻呂はそれに対してどのように考えていたか 2. 史料(4) 大伴家持の歌 「おほろかに 心おもひて 空言も 祖の名絶つな」とは 3. 古麻呂・家持の考えと行動は整合的であるか、ないか、
5 奈良時代の文化	
史料(5)の物語から当時の社会や人々の心性について読み取れることを自由にまとめてみよう	1. 主な登場人物はだれか（4人） 2. 主人公が生き返ってからの舞台はどこか 3. 思いつくことはないか ヒント：死 市 盗品 経
6 桓武天皇とその治世	
系譜からみて、桓武天皇の新王朝意識とはどのように説明できるだろうか？（その内容と歴史の上で持った意味）	1. 奈良時代の天皇は天皇家のなかでのどのような血統といえるか（系図参照） 2. 光仁天皇・桓武天皇は奈良時代の天皇家と血統上、どのような関係にあるか 3. 下の文から、桓武の新王朝意識の歴史的な意義はどう考えられるか  長岡京遷都の契機としては、A. 新王朝創設（桓武即位）の辛酉革命（781年）に続く甲子革命（784年）を中国思想によって位置づける、B. 天武系皇統の都平城京を拠点とする反桓武勢力を排除する、C. 平城京に根強い仏教勢力を排除する、D. 平城京と難波京の複都制を一本化して緊縮政策をとる、E. 平城京よりも水陸交通の便にめぐまれた要衝の地を選択する、F. 山背国の秦氏など渡来系有力氏族の経済力と血縁関係に依存する、G. 光仁天皇の没（781年）による平城京の死機を忌避する、などのことがあげられるが、やはりこれまでの天武系皇統の都としての平城京から遷ることによって新王朝の基盤を確立しようとする桓武天皇の計画と、それを支えた藤原種継ら貴族層の意向という政治的契機に注目するべきであろう。 『大学の日本史1 古代』より
7 最澄と空海	
最澄や空海の仏教は奈良時代の仏教に対して新しいといえるのだろうか？ ひとつの学説をつかむ	まず成立時期である。旧来の理解は、奈良時代に成立した南都六宗という「旧仏教」に対して、平安時代になってできたのが「平安新仏教」というものである。だが南都六宗は、本当に奈良時代に成立していたのだろうか。 そこで奈良時代の南都学僧の著作をみると、（略）宗派の核となる教学が、未消化なのである。最澄・空海が登場した頃の南都六宗は、天台・真言両宗に相対して、「旧仏教」と位置づけられるほどの内実を備えていない。それが備わるのは、最澄・空海の活動開始後、天台・真言両宗成立とさして変わらない時期であり、南都六宗は、「平安新仏教」と同時期に、教学宗派として成立するのである。 次に仏教の内容である。一般に「平安新仏教」の特色とされる事象・要素は、いくつかある。例えば山林修行、山岳寺院、排他的党派性、地方布教、それに最澄なら天台教学、空海なら密教という、新教学もそうである。だが実は、これらは最澄・空海の専売特許ではない。山林修行は、奈良時代の南都官僧において特殊な行業ではなかったし、山岳寺院の先駆けとなる山中の修行拠点も存在した。 また奈良時代後半には、宗派間の論争や僧侶争奪が頻発しており、排他的党派性も顕在化していた。そして南都官僧の積極的地方布教も、研究者の認めるところである。教学にしても、天台教学は、天台学匠でもあった鑑真が先に将来していたものである。空海の密教も、経典・呪法など多くを奈良時代の古密教から継承している。その新しい密教教学についても、南都顕教教学枠内で理解し得るとする説すら見えているのである。 『週刊 日本の歴史 平安時代1』より  1. 課題文は次の命題に肯定的か、否定的か 命題：最澄や空海に代表される平安時代初期の仏教は新しい 2. 上の立場をとる根拠は何か
8 御霊信仰・神仏習合	
九世紀後半において、御霊信仰はど	1. 貞観5(863)年、神泉苑御霊会が行われた直接的な理由は何で

<p>のような状況にあったと考えられるか？</p>	<p>あったと考えられるか 史料(6)・表(1)</p> <p>2.その後、御霊信仰はどうなったか。</p> <p>・廃れ、消滅していった ・更に流行していった</p> <p>3. 2の判断の根拠となる事実は何か そうなった理由は何であったと考えられるか</p>
<p>9 藤原良房と摂関政治</p>	
<p>藤原良房の権力、天皇との関係はどのように理解することができるか？</p>	<p>850年3月、仁明は死去し、道康親王が即位した。文徳天皇である。仁明を深草山陵に葬ったまさにその日、明子は文徳の皇子惟仁を出産した。さらに5月、橘嘉智子がみまかり、ここに前代の権力者はみな姿を消した。11月、良房は生後8ヵ月の惟仁親王を皇太子に立てる。全ては権力集中を達成した良房の意のままであった。文徳は853年まで東宮で暮らし、ついで梨下院に移り、854年には大内裏を出て冷然院に入った。冷然院には母順子があり、その庇護の下に入ったのである。文徳は生涯内裏を在所とすることはなく、後の清和・宇多の例から推せば、彼は外戚良房によってほぼ完全に意志・行動を制約されていたと見られる。857年、良房は太政大臣となった。良房は太政官政務を弟の右大臣良相に委ねた。自らは後の摂政と同じように天皇大権を掌握し、事実上、詔勅の発出主体になったと考えてよさそう。文徳は858年（天安2）に死んだ。9歳の惟仁が即位し（清和天皇）、外祖父良房はいぜん太政大臣として全権を掌握し続けた。清和は傀儡そのものとして、母明子とともに東宮で幼帝時代を送ることになる。</p> <p>吉川真司「平安京」より</p> <p>それでは良房が太政大臣に任命された意義はどのように捉えられるだろうか。文徳天皇は政治に対して積極的ではなく、また立太子問題で良房に屈服したという見方がある。その見方を推し進めていけば、太政大臣への就任は良房が文徳天皇に要求したものであり、就任後はその地位に基づき良房が天皇に代わって政治を専断した、すなわち実質的に摂政の職務を果たすようになったとの捉え方も可能であろう。しかしこのような見方は、やはり皮相に過ぎるように思われる。太政大臣任命の約2ヵ月後にあたる857年4月、叙位・任官が行われた。そのことを記す『日本文徳天皇実録』の記事の冒頭には文徳天皇が紫宸殿に出御したと記されている。これは叙位・任官の結果を、文官・武官の人事を担当する式部省・兵部省が、紫宸殿の南庭に列立する群臣に対して告知する儀式についての記述であり、その際天皇が紫宸殿に出御するのは、いわば当然のことであった。にもかかわらず、ここで出御のことが特筆されているのは、文徳天皇がこの時点で天皇大権のなかでもっとも重要な権能である叙位・任官などの人事権を維持していたことを示している。したがって文徳天皇の時代の太政大臣良房は、天皇の権能を代行するというのではなく、基本的には太政官の上首としての立場で国政に臨んでいたと考えるべきであろう。858年、文徳天皇は「倉卒」（突然）に重病に陥り、言語不通という状態で4日後に31歳で死去、ただちに惟仁親王が皇位を嗣いだ。清和天皇である。時に9歳。7世紀末、15歳で天皇となった文武を大幅に下回る幼帝の誕生となった。清和天皇はこの年11月に即位の儀式を行い、『公卿補任』など後世の史料では良房をこの時摂政としたとする。</p> <p>佐々木恵介『天皇と摂政・関白』より</p> <p>1. 吉川真司説・佐々木恵介説ではそれぞれ良房と天皇との関係をどのようにとらえているか</p> <p>文徳天皇との関係 清和天皇との関係</p> <p>2. この2説の共通点、および相違点は何か</p>
<p>10 菅原道真の生涯</p>	
<p>この人たちはいったいどうなっているのか？ 自由に（展示解説風に）</p>	<p>1. 本文を参考に想像をめぐらせる</p> <p>北野天神縁起絵巻 史料(7)</p>
<p>11 武士と反乱</p>	
<p>将門の軍隊は歴史的にみて、どのような性格を持っていたといえるか？（鈴木哲雄説）</p>	<p>律令国家の軍団制は、騎兵隊と歩兵隊とからなるが、諸国軍団の指揮官である軍頭に求められた能力は、「騎射」の騎兵隊に対するより、「歩射」を基本とした歩兵隊に対する指揮であった。これが、古代の武士である諸国軍団の軍頭などに要求された武芸の第1であった。古代に</p>

	<p>は、弓矢や大刀・刀などの武具は自弁であったが、指揮具である鼓・鉦（ドラ）・角（ラッパ）や旗幡は私家に置くことは禁じられていた。</p> <p>『将門記』では、冒頭の野本の合戦において、将門軍を待つ源扶らの「軍の体」は、「神に向いて、旗を靡かせ鉦を撃つ〈鉦は兵鼓なり〉」と記載されている。こうした指揮具は、中世武士の合戦には登場しないものであり、『将門記』の「兵」は武具や戦法の面では古代的な武士であった。</p> <p>中世武士を象徴する武具は、「大鎧」と「日本刀」であり、中世武士といえは、やぶさめ神事などに残る騎射する勇姿が思いつく。古代の短甲や挂甲が左右対称であったのに対して、大鎧は馬上で弓を射るために左右不均衡に作られており、そこに見事な非対称の美がある。古代の刀は直刀で、刺突用のものであったが、中世の日本刀は独特の反りをもった彎刀で、斬撃用とされる。そして、将門の乱の時の大刀は初期の段階の彎刀が使用された可能性が高いとされている。つまり、『将門記』の兵の武具は、大鎧・日本刀以前のものであり、大鎧、日本刀、そしてやぶさめ儀礼は12世紀中葉に成立したことは動かないのである。</p> <p>ではもっとも本質的な問題である、武士と従者との主従関係の質についてはどうか。平安時代、京職の「兵士」も雇役された存在であり、九世紀末の群盗蜂起の際に召集された兵士も傭兵であった。多様な形で「兵士」が置かれたが、それは給与支給を前提とした国家による「傭兵」であり、雇う際に評価されたものが芸能としての「武芸」であった。10世紀以降には、貴族に仕える「諸家兵士」と国司が雇った「諸国兵士」が登場するが、ともに比較的自由な関係によるもので基本的には傭兵であった。</p> <p>将門を含めて『将門記』の兵たちは、優れた騎射武芸の持ち主であり、「従類」と呼ばれた騎馬隊を率いて活躍するが、合戦での主力は「伴類」と呼ばれた平民百姓で、歩射が戦闘の主力であった。つまり、『将門記』の兵たちの戦闘方法も古代的なものであったという。</p> <p>中世武士の成立には、中世的な所領支配や所領経営が重要であり、源頼朝によって体制化された、所領を介した「本領安堵」と「新恩給与」という「人的な主従制と所領の恩給制との結合としての封建制」の成立が規定的な意味をもったことになる。</p> <p>鈴木哲雄『平将門と東国武士団』より</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 問題とされる2つのテーマはなにか</li> <li>2. そのテーマについて、古代・中世それぞれどのように区別できるか</li> <li>3. 将門の軍隊はどちらに区分されるか</li> </ol>
12 藤原道長の時代	
この人の夫はだれ？	<p>（夫の名前を調べて書き出す）</p> <p>県犬養橋三千代 藤原詮子 藤原明子 鸕野皇女 阿閑皇女 高野新笠 源潔姫 吉備内親王 粟田諸姉 齐明天皇 藤原彰子 藤原定子 井上内親王 推古天皇 藤原光明子</p>
13 院政の時代	
院政はやや後の時代からは、どのようにとらえられていたか？ 史料(7)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 後三条天皇はどのような人物とされているか</li> <li>2. 「すえ」（＝末）とはなにか</li> <li>3. 「すえ」にはどのような現象が起きたか 「かたぶく」とは</li> </ol>
14 平清盛の生涯	
古代と中世の間をどのようにとらえたらよいのか？	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 鎌倉幕府の成立を中世の始まりと考える どのような点に着目しているか</li> <li>2. 院政を中世の始まりと考える どのような点に着目しているか</li> </ol> <p>『日本史B』の9冊の教科書のうち4冊が「院政の成立」もしくは「院政と荘園公領制」といった項目を中世の冒頭に持ってきており、2冊が10世紀における「荘園の発達」とともに中世という時代を論じはじめている。山川出版社『詳説日本史B』は後三条天皇の即位と延久の荘園整理令・荘園公領制の成立をもって、中世という時代を論じはじめている。後三条天皇によって発せられた延久の荘園整理令によって荘園公領制が確立され、中世と呼ばれる時代がはじまったということ</p>

	になる。
	3.なぜこのような違いが生まれてきたのか 考えてみよう

## 使用した史料・図版など

### 史料(1) 『続日本紀』大仏造立の詔

ここに天平十五年歳次癸未十月十五日を以て菩薩の大願を発して 盧舎那仏金銅像一軀を造り奉つる。国の銅を尽して象を鎔、大山を削りて堂を構え、広く法界に及ぼして朕が知識となす。遂に同じく利益を蒙りて共に菩提を致さしめん。それ天下の富を有つは朕なり。天下の勢を有つは朕なり。この富と勢を以てこの尊き像を造らん。事や成り易く、心や至り難し。ただ恐るらくはただに人を勞すことのみ有りて能く聖に感くることなく、あるは誹謗を生して反りて罪辜に墜さんことを。このゆえに知識に預かる者は懇に至れる誠を発し、おのおの介なる福を招きて、日ごとに三たび盧舎那仏を拝むべし。自ら念を存しておのおの盧舎那仏を造るべし。もし更に人有りて一枝の草・一把の土を持ちて像を助け造らんと情に願はば恣に聴せ。国郡等司、この事に因りて百姓を侵し擾し、強いて收め斂めしむることなかれ。遐邇に布れ告げ朕が意を知らしめよ。

### 史料(2)

#### 加茂遺跡勝示札

郡符す （以下略）

- 一つ 田夫、朝は寅時をもって田へ下り、夕は戌時をもって私に還るの状
- 一つ 田夫、意に任せて魚酒を喫うを禁制するの状
- 一つ 溝堰を勞作せざる百姓を禁断するの状
- 一つ 五月三〇日前をもって田殖の竟るを申すべきの状
- 一つ 村邑の内に竄れ岩みて諸人となるを疑わる人を搜し捉うべきの状
- 一つ 桑原なくして蚕を養う百姓を禁制すべきの状
- 一つ 里邑の内、故に酒を喫い酔い、戲逸におよぶ百姓を禁制すべきの状
- 一つ 農業を慎勤すべきの状

嘉祥二年二月十二日

### 史料(3)

#### 『続日本紀』

奈良麻呂云わく、「聖體宜しきに乖き多く歳序を経る。消息を闕看するに、一日に過ぎず。今天下乱れ、人心定まることなし。若し他氏の王を立つる者あらば、吾が族は徒らに將に滅

亡せん。願はくは、大伴・佐伯宿祢を率いて、黄文を立てて君となし、以て他氏に先ずれば、万世の基とならん」。古麻呂曰はく、「右大臣・大納言、是の両箇の人、勢に乗りて権を握る。汝、君を立つと雖も、人豈に従うべけんや。願はくは言うなかれ」。

闕 - うかがう 聖體 - 天皇の体 右大臣 - 藤原豊成 大納言 - 藤原仲麻呂

#### 史料(4)

##### 『万葉集』

##### 族を喩す歌一首

久方の 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇祖の 神の御代より はじ弓を 手握り持たし 真鹿子矢を 手挟み添へて 大久米の ますらたけをを 先に立て 靱取り負ほせ 山川を 岩根さくみて 踏み通り 国求ぎしつつ ちはやぶる 神を言向け まつろはぬ 人をも和し （それ以後、代々の天皇に仕えてきた） 惜しき 清きその名ぞ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる 大夫の伴

右 淡海真人三船が讒言せしに縁りて出雲守大伴古慈斐宿祢解任さる これを以て家持此歌を作る也

#### 史料(5)

##### 『日本霊異記』

般若心経を心から敬い読んでいた女が、現実には閻魔王宮に行き不思議なことを現した話

利苅の優婆夷といった在俗の女の修行者は河内の国の人であった。生れつき心も清らかで、仏・法・僧の三宝を信じ敬い、般若心経を読み、これを日常の勤めとしていた。お経を読む声はたいへん美しく、おおぜいの僧や俗人たちに好まれ、親しまれていた。聖武天皇の御代に、この優婆夷が夜寝たところ、病気もなかったのに突然死に、閻魔王宮へ行った。すると閻魔王は優婆夷を見て立ち上がり、「伝え聞くところによるとそなたは美しい声で般若心経を読んでいるとか。わしも読む声を聞きたい」とおっしゃった。そこで優婆夷は読んだ。閻魔王はこれを聞くと涙を流して喜び、座を立て、優婆夷の前にひざまづいて礼拝して、「貴いことだ。ほんとうに世評で聞いていたとおりであった」とおっしゃった。それから三日過ぎて閻魔王は優婆夷に、「もうよい。早く帰れ」とおっしゃった。優婆夷が閻魔王宮から出てくると、門に三人の者がいて、黄色い衣を着ていた。優婆夷に会ったことをたいへん喜び、「以前ちょっとお目にかかっただけでした。このごろお会いできないので、わたしは恋しく思っておりまして。さあ、お行きなさい。すみやかに帰りなさい。わたしは今日より三日後に、奈良の都の東の市でかならずお会いしましょう」と言った。別れ帰って、ふと見ると生き返っていたのだった。三日目の朝になり、奈良の東の市に出かけて行った。市の中で一日中待ったが、待ち人は来なかった。ただ、いやしい者が市の東の門から市の中



に入って来て、お経を売った。優婆夷の前を立ちふさがるように通って行き、市の西の門から出て行った。優婆夷はそのお経を買おうと思い、使いをやって呼び戻し、そのお経を手に取り開いて見ると、優婆夷が昔お写し申した梵網經二卷と般若心經一卷であった。写経したままでまだ供養もしないうちに失い、長年の間、探し求めたが手に入らなかったものである。優婆夷は心中非常に喜び、その男を盗人とは知ったが、それでもじっとがまんして買った。そこで、過日会おうと約束しか三人は、なんとこの三卷のお経であることがわかった。さっそく、法会を設けて講読し、ますます真心こめて読み誦し、昼も夜もやめなかった。

史料(6)

『日本三代実録』

神泉苑において御霊会を修す。(略)王公卿士、赴き集い共に観る。霊座六前に几筵を設け施し、盛んに花果を陳べ、恭敬薫修す。律師慧達を延して講師となし、金光明經一部・般若心經六卷を演説す。雅楽寮の伶人に命じて楽を作し、帝に近侍せる兒童及び良家稚子を舞人となし、大唐高麗更に出て舞う。雑伎散楽、競いてその能を尽くす。この日、宣旨ありて、苑の四門を開き、都邑の人、出入し縦に観るを聴す。いわゆる御霊は崇道天皇・伊予親王・藤原夫人及び觀察使・橘逸勢・文室宮田麻呂らこれなり。並に事に坐して誅せられ、冤魂、瘡となる。

延して - 呼んで 楽 - 音楽 稚 - 若い 宣旨 - 天皇の命令

『日本三代実録』

是の日 京畿七道の諸人事を御霊会に寄せ 私に徒衆を聚めるを禁ず。走馬騎射・小兒の聚まり戯るは制の限りにあらず。

史料(7)

「北野天神縁起絵巻」本文

延長八年六月廿六日に清涼殿の坤の柱の上に霹靂神の火事あり 大納言（藤原）清貫の卿袍に火付きて伏し転び喚き叫べども消えざりき 右中弁（平）希世朝臣は顔焼けて柱の本に倒れ伏し 是茂朝臣は弓お執りて向かへば 立ち所に蹴殺され 近衛忠包 鬢焼けて死にけり 紀蔭連は焰に咽びて悶絶す 是則ち天満大自在天神の十六万八千の眷属の中の第三の使者火雷火氣毒王の仕業なり

史料(8)

『愚管抄』

後三条の聖主ほどにをはします君は みな事のせんのすえずえにをちたたんずる事を ひ

しと結句をばしろしめしつ御さたはある事なれば 撰籙ノ家関白撰政をすずろにくみすてんとは何かはをほしめすべき。只器量の浅深・道理の軽重をこそとおぼしつ御沙汰はある事なるを すえざまには王臣中あ（悪）しきやうにのみ近臣愚者もてなしもてなしつ世はかたぶきうするなり。王臣近臣世にあらん緇素男女 これをよくよく心うべき也。

撰籙 - 撰関家 緇素 - 僧尼と俗人

表(1)

862年	咳逆病の大流行 藤原良房の感染
863年	神泉苑の御霊会
864年	富士山の貞観大噴火（866まで）阿蘇山噴火
865年	民衆が御霊会と称して集会することを禁じる
867年	阿蘇山噴火
868年	播磨・山城地震
869年	摂津地震 陸奥国の貞観地震 祇園社の御霊会（？）
874年	開聞岳の大噴火
878年	相模・武蔵地震
887年	仁和地震（南海トラフ巨大地震？）
987年	北野御霊会（史料上の最初）

#### IV. 解説と若干のコメント

いくつか、補足的な解説を加える。

##### II－1：ガイダンス

この課題は授業の最初にあたり、歴史的な資料と文学作品などとの違いや、資料の内容と作成年代のずれなどを考えるもの。受講生の解答はほぼ正しい。

##### 3：大和王権の成立

5世紀の基本的な史料として『日本書紀』だけでなく、『宋書』倭国伝の倭の5王の記述や稲荷山古墳出土鉄剣銘などがある。この課題はそれぞれの史料的信頼性を基盤に、各命題の事実性を考えるという、文献史学の基本となる思考のトレーニングのつもりである。

##### 5：大和王権の体制

倭国の中心が近畿地方であったことの背景をとにかく考える課題。歴史学の持つ文明批判の性格を考慮して、このような大きなテーマを設定している。考えるきっかけを提供する

こと自体に意義があると思う。10：最初の都城藤原京 同じく、短い文章をもとに、自由に発想して記述することを求めている。

7：中大兄皇子と大化改新 8：白村江の戦いと壬申の乱 12：律令体制の概要2

これらの課題はいずれも史料などから、比較的よく知られた事実に関する、現在の研究の概要を把握するもの。著名な事実が史料と結びついて存在することを理解してほしいと考えている。

14：平城京と人々の生活

この課題は正倉院文書の1点を読むことを通して、当時の平城京における生活を考えるもの。特に書き下しをせず、原文のまま提示する。かなのない時代であることに気づいてもらうため、また、品物の列挙が中心であり、文意をとることは比較的たやすいと思われるから。文書から判明する一連の経緯の説明はていねいに行う。列挙された品物からさまざまな発想が生まれることを期待しているが、実際にも、受講生はさまざまな知見を記してくれる。なお、『大日本古文書（編年文書）』の釈文および写真は東京大学史料編纂所 HP、正倉院 HP で参照が可能である。

### Ⅲ－3：長屋王の生活と生涯

木簡の読解。石川県加茂遺跡の膀示札の記載内容から自由に考える。当時の国家が村や民衆の生活についてどのように認識し、統制しようとしていたかを論じる。いくつかの生活の場面に分類して考えるように誘導する。

4 光明皇太后と藤原仲麻呂

『続日本紀』の記載と著名な大伴家持の「族を喻す歌」を素材に、橘奈良麻呂の変時の大伴古麻呂と家持の思考と行動を考えるもの。古麻呂はこの陰謀に加わり、滅亡したが、家持は加わらなかった。

5 奈良時代の文化

『日本霊異記』中19「心経を憶持せし女の現に閻羅王の闕に至り奇しき表を示しし縁」を読解し、当時の社会や人々の心性について自由に記述するもの。

7 最澄と空海

学説の要約。9 藤原良房と摂関政治 11 武士と反乱 も同じ。7では命題「最澄や空海に代表される平安時代初期の仏教は新しい」を提示し、当該の学説が肯定・否定のいずれの立場をとるかをテーマとし、9は2人の学説の違いを問う。

10 菅原道真の生涯

『北野天神縁起絵巻』のいわゆる清涼殿落雷の場面について展示解説風にコメントを加えるもの。読む人の興味を引き、かつ、短く的確なコメントを付すように求める。

14 平清盛の生涯

古代と中世の間を、それぞれ鎌倉幕府の成立・荘園公領体制の確立でくぎる見解を比較するもの。時代の区分の前提となる視点を問い、視点が異なれば、評価が異なることに対する理解をうながす。

学説を読み取ることは、文章読解のトレーニングとして有効であると考えるが、研究方法や学説が一つではなく、さまざまに展開する可能性があることに対する理解を深める必要がある。時間的な制約があるなかで、過大な分量にならないように留意している。

史料を読解する際に、どうしても読み方にこだわる傾向が強くなりやすいと思われる。大学での日本史の教育および研究で、史料の読みはすべての根底に位置する基礎的なスキルと考えられているからである。そのこと自体は誤りでないが、この場合は、その学習を目的とするわけではないので、的確な現代語訳などを利用して、過度に読み方に拘泥しないようにしている。

以上のような課題を継続して課し、少しであるが、時間をかけて取り組ませることによって、史料のあつかいや学説の読解に近づいてもらい、その後のゼミナールなどの演習科目にスムーズにつなげることを意図している。ただし、その成果を正確に測定することは難しく、できていない。また、これを授業そのものの成績評価と結びつけることの是非や、どのように結びつけていくのかの検討も課題である。